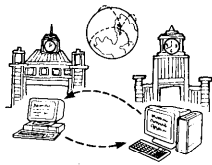
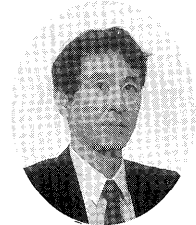


巻頭言



学会の機能

寛 捷 彦[†]



情報処理学会は、会員3万人以上をかかえる大規模学会である。学会の先達の努力がこの規模を達成させたのである。

大規模であるだけではない。その会員の層も、また広範にわたる。製造現場に働く会員、その管理・経営に働く会員、研究所・大学で研究・教育に働く会員と幅が広い。その対象とする分野も、基礎理論からアプリケーションまで、ハードウェアからアーキテクチャ、ソフトウェア、さらにはコンテンツまでと広きにわたる。

この広範かつ大規模な学会をまとめるのは、“情報処理”という言葉だけである。実際、定款にも学会の目的が「電子計算機等を中心とした“情報処理”に関する学術、技術の進歩発展をはかり、会員相互間および関連学協会との連絡研修の場となり、もって学術文化の発展に寄与すること」とうたっている。

かつて“情報処理”という言葉は、それ独自のアイデンティティを保っていた。“電子計算機等を中心とした”という修飾がつけばなおのことであったであろう。それは、ごく一部の選ばれた人達だけが使うことの許されたものであったし、今となってはごくごく能力の限られた道具でもあった。だからこそ、互いに“夢”を語り、その実現方法を探る努力を相互に理解しあえる環境にあった。

今日ではどうだろうか。“計算機”—いや、今ではコンピュータといい、スパコン、あるいはワークステーション、さらにはパソコンといいかえるべきか—は普遍的である。“情報処理”も、また、普遍的である。国をあげて、“スーパーハイウェイ”だの、“マルチメディア”だのと皆が走っている。“情報処理”も“計算機”も、すべての人のものになってしまっただけで、学会としてのアイデンティティを示すものとはなりえない環境にある。それにもまして、会員相互に“言葉”さえも通じあえない状況になりかかっているのではないか。

学会といっても、それぞれによってそこに集ま

る人の成り立ちはさまざまである。ほとんど特定の職業集団、それも資格によって裏打ちされた職業と密接に関係した学会もある。特定の学問分野、それも非常に限定された分野に裏打ちされた学会もある。卒業学科がほぼ特定されてしまう学会もある。

情報処理学会の特色は、これらのいずれにも分類されない、まさに“情報処理”という、よくいえば学際的なキーワードだけで人が集まっていることにある。そこで対象となるものも広範にわたる。実際、国際会議などの会合にしても、多くの専門化したものが興隆をきわめ、全体的な“情報処理”をうたった大規模会合は色を失ったままの状況にある。

もう1つの特色は、“情報処理”という名がしめすとおりに、まさに“実学”に根ざしている点であろう。この特色を生かしていくにはどうすればよいか。これが課題である。

確かに、規格についての検討を情報処理学会が行っているのも、その1つの現れである。現場での、ときに政治的、経済的な現実問題に対して、学術的、技術的な結果を反映しつつ、1つの具体的な案をまとめていく作業は、まさに“実学”そのものである。

しかし、現場の人も、先端的な研究に励む人も、一堂に会しているはずの学会で、いい意味での産学協同が行われる場が、規格関係だけであってよいはずがない。現場で問題になっていることがらが報告され、そこでの工夫が報告される。それを受けて、理論的、学術的な研究が進み、現場に適用される。そうした、生き生きとした交流が日常的に行われる場としての学会活動を、どのようにして作り出していくか、それが課題である。

もちろん、一朝一夕にできることではない。先達の努力を引き継いで、一歩ずつでも前進していくほかはないし、そういう努力なしでは、情報処理学会の発展もありえない。

(平成7年9月4日)

[†] 本会論文誌担当理事 早稲田大学理工学部情報学科